



男 乙  
三十番 久遠  
秋十己音 廿





三十一番歌合

霜月十五日夜

一番 寒夜月

左 勝

右 約言

秋小月一露とよき霜よ結ひての月乃新しき

右

前大納言為富

空乃海のさかりとまきく物にほらてとさゆり月はさか  
たあかりと露を霜とむきとひてさう指跡の  
月跡掃のうら一箇中々  
た方り云浪やと水ととゆるておぼわら  
とさうのう母そやとさうえ侍か  
跡云海やゆるうへおととらんこと新よ侍  
らと

た奇と方よらと一箇より権家美トトか誠一



篇幽玄五句は意きり常此弁合乃例と  
して同科なりとすふたの傍やす家こと  
よわりと光いたの弁の気抱りよるん  
もやくた傍よ定中りゆ然あり

二番

尾持

按察使親長

板まのり新之入事秋紙とてそてそつね神ふあつ月か

右

前中納言雅康

いひなむと物もぬ人もさしはたの月と志のてかあやいす  
た方や云こしあか雅なぐとつ  
たあや云後撰集り月とあやれといひそ  
ふのりといつら中弁のうらとさくあまや  
う海くくゆれん

尾持のりあり雅なぐゆり

右弁を月と志のくつらあぬあつらとつら  
あつらと月とあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと  
あつらとあつらとあつらとあつらとあつらと

三番

尾持

前大納言躬

新之入事秋紙とてそてそつね神ふあつ月か

権大納言高徳

右

なにかのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
たやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
たやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
たやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
たやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
たやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて

四番

尾持

冬識基程

とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて

右

右衛門将為廣

とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて

五番

尾持

侍従中納言實隆

とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて

右

冬識永継

とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて  
とやのふれおはさしむるをふたはた月よはあつて

月吹くはる大のりしむらひのさかたれきりて  
なすしつらん桐うらうらとくさう物さうふた  
うら無きともる月と霧と又あまらむら  
しゆらゆる物

六番

尾持

政四

倉の面しれちるふよあきそむいせ井の月や霧よあつん

右

宗伊

ゆ月乃中なるあれさあもるや霧も霧の粒じとあつん  
た方やえとあう難なきゆらうらうら  
たあやえ中なる林うらうらふ物さうふた  
はめつらやうらうらゆらうら  
た奇常の霧月よあつん

霧うらうらとつらあれうらあつる奇  
ゆらうらうらと奇中なるあれと久ら中  
なる川のさうらあつるあや田中六月の中  
うらうらあつるあつるあつるあつるあつる  
うらとあつるあつる

七番

尾勝

政茂

おらあつらうらとく神れ霧とふらうら月あつるあつる

右

頼紗

本がしのもあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる  
た方やえとあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる  
た方やえとあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる  
みよあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる



九番

尾持

右

元為

おれはあかたをよは月乃ららとよむひとあまを  
 あらふ水なれをとらけりかひく月たもひらよ  
 ちりふことあまをねなとらりてり  
 ちりふことあまをねなとらりてり  
 た右あなれを月たもあへりてり  
 素直く一子餘里漂く水浦とらりてり  
 ころ八月十又秋賦とらりてり  
 秋乃奇なるりてり  
 やそりよはとらりてり  
 ころころころころころころころころころころころころ

十番

尾勝

重信

はらあ首思ふとらりてり

白鳥のそはつたひとらりてり

右

玄統

うらまけて神乃の月乃彩とらりてり  
 ちりふことあまをねなとらりてり  
 た方りてり  
 神乃の月たもあへりてり  
 都りてり  
 た方りてり

十番竹雷深

尾勝

長郷

海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

石

元鳥

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

よありて古人もあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

十三番

尾持

大納言

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

石

宗伊

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事

あつらひて海はる中へもあつらひていふ事なほあはれなる事



て湯雲幾子の思ひもさしめらるる事くはふたなり  
り此持よりくゆるり

十三番

尾持

公躬卿

改まらばなひと持せしむる事此の事なりゆりゆり

右

頼行

松と持つ事なき事れれ竹とまきらの心をしめしむる事  
た方よりとくしとて此の竹と若れし事なり  
あつとてとくしとてなり

たのしむる事此の持改のうらやとくしとてなり

右持物と竹の事よ松と竹との事ら共持

くゆるり松と持つ事あらとよりなれりとし松と  
ひつと竹の事なりとすりとすりなりなりなり

ひつと竹の事なりとすりとすりなりなりなり

ゆきとてとくしとてなりとて後意いとうとてなり

とらうとてとくしとてなりとてなりとてなり

なりとてとくしとてなり

十四番

尾持

改憲

長竹よりひつとてとくしとてなりとてなり

右

高郷

他人の事なりとてとくしとてなりとてなり

たのしむる事此の持改の事なり

たのしむる事此の持改の事なり

たのしむる事此の持改の事なり

たのしむる事此の持改の事なり

十五番

左勝

實隆卿

いれて事のいそぎをなまぬはたけの我友はまの書は下地也

右

貞光

うはらふ難はけはけのつらげ端の山とむら書那

七方秘多たうしを

右方アとさうの種ゆりこは難あはえ

右右の書は深淵のいもことわらぬい

十六番

左持

政茂

うはらうつたの事やちひるすて換もる書はさうあが

右

永継卿

うはらふ書とふぬえぬ書は自然あまのつらう書は異行

七方アとさうの種ゆり

右方アとさうの種ゆり

右書のさうしふかあしとらうしはゆるわん

さうらうしとふらうしとらうしはゆるわん

うはらひとらうしはゆるわん

なうしとらうしはゆるわん

右あまのつらう書は深淵のいもことわらぬい

うはらひとらうしはゆるわん

十七番

左持

基徳卿

うはらひとらうしはゆるわん

右

高清卿

うはらひとらうしはゆるわん

右方アとさうの種ゆり

他より下地をうへく雪の音のさけくさる  
 りしころり  
 ちもすそそれとさみいぬまのく竹のうへ  
 一物らんくおりのり  
 陳えうはのこしてさうあ。すうとゆまらんを  
 らあ。くさあかんさうさ  
 小河のあう地もさう。おのつう水とらさ  
 かりへく雪道さくゆめをけくさうの優  
 とわくねく一乃楽よゆりそれとさかたの竹  
 雪地ののこさゆりさうまらんこゆりまを  
 あんがれ又ゆりさうさうらん

十八番

返田

たむけのゆり地をさるさあ竹のうへさるや雪の音

右勝

雅康卿

おん

あり音にまら下地をうへ竹のこさゆりまらんこゆりまを  
 ちもすそそれとさみいぬまのく竹のうへ  
 ちもすそそれとさみいぬまのく竹のうへ  
 りしころり  
 たす下白ゆりひゆりまをさくさうさうさ  
 右寄竹葉と酒よさうさあさるく雪の音  
 皆酔とさうさうさうさうさうさうさうさ  
 よのゆりさうさうさうさうさうさうさうさ  
 されとさあゆりさうさうさうさうさうさ

十九番

左勝

六信

なほくしみるらちもとれはの葉をさかすはの香か

右

為廣郷

ふれれてそれをもみぬ其竹の香とやうに香折の心

ち方やとらうりくわく申す

ち方やとらうりくわく申す

とやあつりあつりひちりあつり

右并十七番よとらうりあつり

たみろくうらうらあつりあつりくわく申す

なほくわ

### 二十番

虎持

政行

わすかんたありそよとれ竹のらよとらうりあつり

右

玄枕

はとれ竹のらよとらうりあつり

ち方やとらうり

ち方やとらうり

二首乃とれ竹のらよとらうり

ち方やとらうり

### 二十番 忍逢戀

右

政行

あつりあつりあつりあつり

右

貞頼

あつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつり

作りぬや

たす綱のほききすうたしつあつとら  
とらつら又あふ番奇合う家降卿の子  
の志略のうとととわられありの野しとれ  
勢の明このうらわわらうと定家卿判  
えり文字六ふありしてゆらやあまらうとゆ  
兼と雅きり七まきくの程とあまらうとゆ  
右奇あさうとゆゆとあしとあうとゆとゆ  
み字と希子のうらわらうとあふとゆと  
右人とゆゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
さうとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
あしはあしとゆとゆとゆと

二下二番

虎

政鑑

うとれとふとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
右勝 為廣卿

いせ川わたれゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
右方とゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
うとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
たふとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
不覚悟ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと  
うとゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

二十三番

虎持

政行

相坂の園路をくぐりてゆく来よと云ふ山とよりゆく

右

雅原郷

ふりてくひぬぬよもそきんりくらくらりいひしよひしひのほ

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

た相坂の園路をくぐりてゆく来よと云ふ山とよりゆく

右相坂の園路をくぐりてゆく来よと云ふ山とよりゆく

よりふんくらくらりいひしよひしひのほ

三十四番

左持

重伝

ふりてくひぬぬよもそきんりくらくらりいひしよひしひのほ

右

高郷

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

三十三番

左持

基郷

たさやうそ母の指

右

元郷

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

たさやうそ母の指

あつとたうのいをまよりと

二十六番

左持

政四

たふうたらそあのもんあつとたう今長月いぬいぬい

右

新四

はらあつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたうあつとたう

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたう

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

二十七番

左持

現長卿

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

右

永継卿

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

二十八番

左持

實隆卿

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

右

玄統

あつとたうあつとたういぬいぬいあつとたういぬいぬい

ちりぞき結う

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う

二十九番

左勝

大納言

あひみくとのねくさくさあつた山ろ露の下ら

右

高橋卿

あひみくとのねくさくさあつた山ろ露の下ら  
あひみくとのねくさくさあつた山ろ露の下ら  
あひみくとのねくさくさあつた山ろ露の下ら

ちりぞき結う

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う

三十番

左

公躬卿

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う

右勝

宗伊

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う

ちりぞき結う  
ちりぞき結う  
ちりぞき結う



たすけとてうらやましくゆりて下白れとて  
りかこしとていふもやとてえゆりてあ  
りしとていふもいひていふも  
右寄あゆはまんとていふもいひて  
はまるとていふもいひていふも  
あゆりていひていひて

文亀三年御哥合

題

樹陰夏月

水色納涼

寄道祝言

作者

左方

女房

後柏原院

唯后

近衛

入道親玉乃永

下河原門跡

前左大臣

徳大寺

あふた片

花山

檀大納言言隆 三条西

左忠門督為廣 上冷泉

按察使俊昌 後小治

檀中納言宣親中山

檀中納言季種 小倉

檀中納言元長 甘露寺

左近少將為和 上冷泉

右方

式部少輔五 伏見

亮胤法親五 梶井

新園白 一條

左大臣 菊亭

參議右大臣中務義澄 大樹

民部卿政為 下冷泉

檀大納言宣胤 中津門

右忠門季經 下過

沙弥采世 二樂軒

參議雅俊 飛鳥井

檀中納言政弘 勅修寺

左忠門將為孝和 下冷泉

後神

篠師

判者

左邊の督藤原朝臣為廣

文龜三年六月十日

哥合

一番 樹陰交月

左邊

女房

せむらふとてこれ 踊る侍いて 木の葉まつ月そむらふ  
式部卿親王

右

ゆやとふ空にふあるとる山の木の葉は月かへるなほとほし  
丸哥聽蟬揮於瓊樹 疑時雨之在枝頭 見月  
影於瑤林 誤秋色之入葉 向其詞 妖艶而其心  
甚深者 歟 右哥短宵早の僅望殘月之掛  
林梢 風躰 雖異他餘情 難及左者哉

二番

左

准后

吹さらけゆあなをよめるるらとらとら月のかほ乃涼と

右勝

孝胤法親王

影ふまゝのふらふらと霞乃よのれうらふらと霞の月  
た袖縁乃影あるに涼〜と侍る傍題とや〜  
〜むむとさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る月の霞と  
影の侍る事一月照平沙夜表霜を〜侍る沙ふ  
影乃映〜とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
のさ〜とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
たは侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事

三番

左

入道親王の歌

あはれあはれ山にみ〜の月よのれうらふらと侍る事  
たは侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
乃餘情と〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
く侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
あはれあはれ山にみ〜の月よのれうらふらと侍る事  
よのれうらふらと侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
〜と霞乃よのれうらふらと侍る事

右勝

お宮白一条

三番

左

新左大臣 徳大寺

あはれあはれ山にみ〜の月よのれうらふらと侍る事  
たは侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
乃餘情と〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
く侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
あはれあはれ山にみ〜の月よのれうらふらと侍る事  
よのれうらふらと侍る事とさ〜と霞乃よのれうらふらと侍る事  
〜と霞乃よのれうらふらと侍る事

右勝

左大臣

たうきんもさゆる後撰集乃哥のちりりこちりて  
ろくろくもさゆるさるれとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてたゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりて一首乃集りてゆるとゆるのちり

五番

たお

おちた

ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり

ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり

ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり

六番

たお

檀大納言

ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり

民部卿

ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり  
ゆるとゆるのちりてゆるとゆるとゆるのちり

あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
ふはては月のさうらひもやほしむし又あつきの月  
よもあつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
はくしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい

七書

左お

七書 智る廣

はくしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
右 檀大納言宣流

あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい

たつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい

書

左お

満太使信書

あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい  
あつきのしるしをさへはるるはしに鑑むるにりしむい

右

七巻の勅書

まゝのありはしむるにまゝ本立りて月の影をすくは  
たちとふふくふくおとる月あつくゆるうり  
た神の影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに

九巻

左

控申細き宣教

まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに

右巻

沙汰末世

まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに  
まゝの影をすくはしむるにまゝの影をすくはしむるに

いはもあまふくふくふくふく又び奇平頭病ふくはり子  
五百番奇合ふはらふくふくふくふくふくふくふくふく  
あふふふとふふ初の字とふふふふふふふふふふふ  
あてあふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
とふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

十番

左

檀中納之香後

いへん子室ふくふく月ふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

右

春後雅後

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
大子室晴天月ふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

十一番

左

檀中納之香後

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

右

檀中納之香後

あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ



新拾遺集やうん。あはれ秋の月乃うらうらと本れ  
るうらうらと若とうらうらひよたりと傳ふあはれ思ひ  
出ゆるまゝ乃と別れうらうらうらうらと傳ふあはれ思ひ  
よまやあり傳ふむたあ陰氣乃同川の初とあて  
作候と傳ふんされと耳よあちてあはれ傳り又うら  
うらとくつと初とさまてあはれ思ひうらうらとあおと  
さく

十二番

左 右

左を少おぬわ

秋を思ふもさくうらうらと傳れあはれやうらうらとさくさく

右

右を中将あおぬわ

あはれ秋の月乃あはれ秋乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ  
あはれ乃うらうら秋乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ

景氣おらうらうらひよと傳ふあはれ思ひ  
乃と伝ふあはれ秋乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ  
給ふといはれあはれとあはれ思ひ  
あはれ乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ  
あはれ乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ  
あはれ乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ

二番 水色納涼

左

左を門督あおぬわ

あはれ乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ

右 傍

右を像あを申あおぬわ

あはれ乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ  
あはれ乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ  
あはれ乃色うらうらひよと傳ふあはれ思ひ

源氏物語よいさう井いさくしのこももれと  
とのあさやあまのりせると信のまどと廻つた例  
乃こくあれ判者つつあまつさう也唐瀬川よ  
りしたあさやあまのりさくしのこももれと  
お急せり尤以右の為孫

十回番

右孫

准后

よこさくいほくよまをせり水乃あさくしのあまのり  
右 少孫宗世

あれとせむよこさくいほくよまをせり水乃あさくしのあまのり  
左波中川より乃んもあまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり  
さう右孫流嗽石とあまのりさくしのあまのり

いほくよまをせり水乃あさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり  
あまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり

十五番

右孫

准后

あまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり  
あまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり

あまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり  
あまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり  
あまのりさくしのあまのり  
くよまをせりあまのりさくしのあまのり

たのまも下白あまりふらうくはるはなはな  
てうぬお

十六番

たお

おちちん

まいまいあまもあまらんぬむとよふて柏のうまのす

ち

檀大納言宣胤

たらふら浪乃霞ちる浪ひるたなまともひさうらうせそく  
まその樹陰乃んまふふやとりぬふた号を  
こせ乃清制あまむむふ思ふ柏乃木陰こそふ  
しうくあも涼うらふれとゆるやうようきたまら  
まふふいひるあやうくゆるやうんたも第二葉の  
の終のふ文字りさうく不ぬ思ひうら二号うらうら  
ゆるも務まていあうらうのうらあうらうらうら

十七番

た

入道親王なる永

すうさうくさうりとりそま浪の流のまうまお

た務

孝胤法親王

あらうり流川も浪とたたてあまのうらひ乃秋せそ吹  
た号流のまうまおまうらてまともゆる君う代乃  
うた家意乃あまもまうらうらうらあまれまゆるれを  
涼うさ乃教とりうらやゆるまおあ伊勢物代  
あまこの流いつれあうらんとゆるまもまうらうたれ  
ま流うらうたらまうらてやゆるん

十八番

た

おちちん 徳大寺

四子乃浦やまうらうら秋の風さう浪うらたぬ

右 翁

式部一親王

踏乃乃わら河色のきり洲来とて入目とをくら水のすゝと  
たとふうたう回子乃う浪多ぬ目いと侍の哥と  
とりてまもしいら秋の風と侍の侍つて一姿  
たうやうは侍と右入目とさる水乃とて一こ侍  
ふみさきき望望あ〜く〜う侍ハ以右有侍

十九番

右 お

女房

流乃きいや〜風あ〜く〜く〜そおらうが〜乃流と流〜芽  
お雲白 一糸

右

おら流つ流乃きいあふま〜して秋とさじ〜ふあひ〜れいや  
た〜流の〜と〜山〜あ〜く〜く〜て〜侍〜流〜氣  
とあ〜く〜く〜相を好難よん〜侍〜と右又後撰有也

らんよあひ〜く〜あ〜く〜て〜く〜く〜侍  
と思ひて流のき〜あ〜く〜く〜て秋とさじ〜ふあひ〜れい  
乃い〜く〜く〜た〜く〜く〜侍〜く〜く〜侍

二十番

右 お

控大納言

あめやう夕浪と〜河の毎〜一葉乃秋と〜く〜く〜

右

右 大納言

〜く〜く〜侍〜く〜く〜侍  
たあ〜く〜く〜侍〜く〜く〜侍  
〜く〜く〜侍〜く〜く〜侍  
〜く〜く〜侍〜く〜く〜侍  
〜く〜く〜侍〜く〜く〜侍

や子五百番合よあやう花やうがそあし  
乃あつこのやうのあまのいささしつう様よいん  
えはつぬうちあつたやうふそよひともをゆるすと  
とゆるとやうにゆるいともあ難くいゆると又こ  
あつ事をもゆるゆるねいて借回料

二十一番

九

控申納定章程

夕暮のあきとて遠くともあをせよやうはつ秋のいさ  
右様

夏にともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
左の遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
やうよゆるともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
合よあしこの本れあつたていづくの遠くともあやう遣水

さる遠くあつたていづくの遠くともあやう遣水  
とていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
何もあ者不難くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
とていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
をともあつたていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
うへ乃あつたていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
とていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
かとの事つたていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
やりあ乃いづつたていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
但等回つたていづくの遠くともあつたていづくの遠くともあやう遣水  
さう以右の様

二十二番

九 様

梅本使後書

あまのうみなるにわたるをみれば  
 控申納之政歌

あまのうみなるにわたるをみれば  
 右等臣もろくろりるも国ものつらきに  
 同乃音あのみたらしむも年よ無なるん  
 えぬに侍らりしやま又納縁乃心は  
 ありてはあをけりてあはれも  
 ありぬくことなきも  
 氏君とやいづるも  
 白思く侍らり  
 とりてはあが  
 やりてはあが

二十三番

左 傍

左とわがおるわ

神をそそぐ源を  
 冬 彦 雅 俊

右

冬 彦 雅 俊

じつとあつと神を  
 右 彦 云 殊 観 摸 之 上 避 池 亭 納 涼 之 流 融 山 水 を  
 流之源道然哉左 彦 取 兼 輔 輝 泉 河 之 倚 語 向  
 其 躰 俊 逸 也 匪 掬 古 家 之 遺 流 剝 梁 院 暑 之 風  
 味 者 乎

二十四番

左

控申納之宣親

すくすくはくち  
 右 傍

左と中おる者名は

涼しき水乃とて行水乃とてせしむる  
たぬやそれとて白濁りてあつて  
下りあしけり但空流るるは  
あつてあつてあつてあつてあつて  
たつてあつてあつてあつてあつて  
やとてあつてあつてあつてあつて

二十五番 寄道祝言

たお

入る親王道承

かたはらつてあつてあつてあつてあつて  
たぬやそれとて白濁りてあつて  
下りあしけり但空流るるは  
あつてあつてあつてあつてあつて  
たつてあつてあつてあつてあつて  
やとてあつてあつてあつてあつて

た

式部は親王

たぬやそれとて白濁りてあつて  
下りあしけり但空流るるは  
あつてあつてあつてあつてあつて  
たつてあつてあつてあつてあつて  
やとてあつてあつてあつてあつて

二十六番

たお

おたあつて 徳大寺

たぬやそれとて白濁りてあつて  
下りあしけり但空流るるは  
あつてあつてあつてあつてあつて  
たつてあつてあつてあつてあつて  
やとてあつてあつてあつてあつて

た

書流は親王

たぬやそれとて白濁りてあつて  
下りあしけり但空流るるは  
あつてあつてあつてあつてあつて  
たつてあつてあつてあつてあつて  
やとてあつてあつてあつてあつて

ひろふあひんめくも乃高乃切つては浦多ききふ  
きららるゝ宗道乃儀 勅令下りもくくけきく信れ  
とい清代はるる撰集もあつて思ひつれ信り仍  
又云務云劣

二十七番

たお

権大納言の言陸

しきまきんび大津のさ乃さあささつ天の思つさ乃るのたあせ

右

あま白 一葉

ふくふせいしつちさつこさきん代とたさきしるの始ありなれ  
右二号日本紀神代卷よあさつてつたあひん神天見を  
勅令よ勅一ましくくる信よ善なる防備とさるる  
よやひひ一まてさあさるる乃大津さ乃さあささ  
天日嗣と信る者天智天皇と云乃大津さ乃さあさつて

まああひんめくも乃高乃切つては浦多ききふ  
きららるゝ宗道乃儀 勅令下りもくくけきく信れ  
とい清代はるる撰集もあつて思ひつれ信り仍  
又云務云劣  
まああひんめくも乃高乃切つては浦多ききふ  
きららるゝ宗道乃儀 勅令下りもくくけきく信れ  
とい清代はるる撰集もあつて思ひつれ信り仍  
又云務云劣  
まああひんめくも乃高乃切つては浦多ききふ  
きららるゝ宗道乃儀 勅令下りもくくけきく信れ  
とい清代はるる撰集もあつて思ひつれ信り仍  
又云務云劣





とやも魚うしん

三十番

たお

准后

のふとむい人やあらんもねと今みちあるは代よせいつい

た

民部政為

しりくのささりむいむい代と才よむとそとや誰とあふん  
に賢人の世よりくはくむいむい傳説呂望うたひ今  
も信んくさやと思ひつとた君乃あひんりつと一  
乃いふあはくくのささると誰も才よむとそとあふ  
ん事しりつりやあひなりつるお

三十一番

た

おれたた

しはりしとるあふむい代と一あはりあふとしりつとあふむい

た 務

た務の督書

あく乃たのむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
たあむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
あむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい

三十二番

た 務

指中納言書

むいむい乃あむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい

指中納言書

むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい  
むいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむいむい

文亀

必々僊ハシし君子乃極ハシよるも人々を悦ばしむるに  
ふあれと下りて世を治めんとすもやうなまはさ  
第三の殊あはれなりなり左難と云ふ事なり  
ゆゑに

三十三番

九お

左書(書)警る廣

あはれなるも人々を悦ばしむるに

七

左書(書)警る廣

あはれなるも人々を悦ばしむるに  
たよは乃答る人の別者なりなり邂逅乃神言合  
ふくむるに聖書乃才ありてなりなり  
あはれなるも人々を悦ばしむるに  
あはれなるも人々を悦ばしむるに

あはれなるも人々を悦ばしむるに  
あはれなるも人々を悦ばしむるに  
あはれなるも人々を悦ばしむるに  
あはれなるも人々を悦ばしむるに

三十四番

九お

左書(書)警る廣

あはれなるも人々を悦ばしむるに

七

左書(書)警る廣

あはれなるも人々を悦ばしむるに  
あはれなるも人々を悦ばしむるに  
あはれなるも人々を悦ばしむるに  
あはれなるも人々を悦ばしむるに

御後さるとそ敵一得ん流されし高河原なりき  
ゆきつゝ何とあるか思ひありせし事御れ  
の願はしやとてや持てておれ

三十五番

左お

女房

つこそ世に過さんなりはるる人また一ふたをせし  
六 春後志を中お美院

もろくのしつふも世にもあまの世に思ひ  
九つこそ世に過さんとはる何とある人乃  
御せり述而不作信而好古とりのるるるる  
や侍らん又よりよる人と侍る高河原若先をみて

とあてついでい侍とていふ海もあつと極よ侍  
右君よ申せせと侍るたよ極言乃婆とていふ  
らん振るるとよくつくも侍るれ抑聖明の世  
あもつと賢作と申好よ侍る心とていふと  
つく思ひにられ侍るあつと極言つとていふと  
りせ侍りんを画始乃るもいふとあつりれ人等  
とゆめくつと馬麟趾の化とていふ世をまの  
つ急降周の若乃とていふと侍るまつとていふ  
君も侍るもあつと侍るあつと侍る乃つとていふ  
つと思ひあつと侍るあつと侍るあつと侍る  
て難波のつと侍るあつと侍るあつと侍る

三十六番

九

梅津使役



花園院おた大臣 頁二

冬後承沈 頁二

権中納言之冬後 頁三

民部卿改爲 頁一

右馬頭督爲廣 頁二

権大納言之官胤 頁二

按察使後等 頁一

右馬頭督季經 頁一

権中納言之官親 頁二

沙孫宗世 頁一

権中納言之季經 頁二

冬後雅俊 頁一

権中納言之冬 頁三

権中納言之改元 頁二

左と右おる和 頁一

左と中おる春 頁一

秋十五番歌合

一番 秋花

左勝

義俊

いよるんはる春より秋を嘆むと花さぬ野も交はるよまわ

右

義宗

わすなすの花の時を此神乃露志やまをばはてよ秋はる

た乃歌ん春秋乃わくさひも右来優若と変し

かたはるやあれしむくくくくくくくくくくくくくくく

ぬ跡色まきくくくくくくくくくくくくくくく

あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

右れ秋秋乃花の野とまきうめく秋れす急流

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

か〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

字よつはいゆあうし新めくともりく

二番

左勝

右生

一と後れ四方のあふ秋の脚をいさう子種れむとわむけり

右

左阿

野色れ病もとのいほとわむの子種よつまる神乃くとも

たの秋これとちのあく種とのいほとくともむ

たの秋花よりのも食免れらよけとくともむ

事なまけあくや林網乃一葉不と取戒のいまめ

ともや成ゆらんた勝めく

三番

左持

右好

始風は尾むあふよれ野色れとめくともむ

右

左周

ねとけくも程むけけくむ候むの子種あくこれ野色乃くとも

たの秋花あくともむと野色と耀錦乃くとも

なとれくとも興わりやみくともりは色に尾むと錦

ともとくともくともけくとも紅葉葉萩乃くともめくとも

かてくとも

たの秋子種なつこれ網草乃くこれくともくとも

柳のいほ地ほせけくともやめくともたけくとも

四番

左持

右世

よがはくともくともくともわくとも葉花のまらけくともめくとも

右

左秋

わくともめくともくともくともくともくともくとも

大正十三年

あふれうー ち霧りこめくきくくくくくくくくくく  
とあくたえもり ち秋宵二白るくくくくくくくくくく  
魚の別くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
とわくくくく

五番

左勝

永純

あふれうー ち霧りこめくきくくくくくくくくくく

右

右仍

小菘系多くはまてあひく指れを花すきききききききき  
ち奇大くはまの草根かち小わつちわつちわつちわつち  
く小系れ枝とてなぐ事眼あめわつちわつちわつちわつち  
わつちわつちわつちわつちわつちわつちわつちわつちわつち  
ち色くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

濃淡乃らりまわりあされくくくくくくくくくくくく  
但しとむすくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
奇くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

六番 秋戀

左勝

義永

あふれうー ち霧りこめくきくくくくくくくくくく

右

後世

秋の物ゆりへのののちのちのちのちのちのちのちのちのち  
ち秋の落月満屋果中くくくくくくくくくくくくくく  
くくくく感慨うー

ち冬就中腸断是秋天と吟くくくくくくくくくくくく  
てあふれなむちの秋乃らりあけたりくくくくくくくく

七番



左

立好

うにまのさしむ家世とわさるるさしむ秋乃わさるる孫

右勝

義後

うに秋とわさるるさしむ家世とわさるるさしむ孫れんあり孫り

あまれうに孫乃ん右秋今夜郡別月園中只撰

看るるさしむさしむあまれありさしむ右勝

八番

左

吉仍

秋のさぬ少麻ははまの都さぬていさぬさる神やさるるあ

右勝

親秋

夏とやいふ人のわにれ風乃さしむくな家世のれんあり

左麻とさしむてさるる神とさしむけくさるるいさる

うにさしむ秋風れわさるるいさるるあ

九番

左

足阿

ゆわいて秋なるに夜と秋の虫れ鳴ると何せ孫のいさる

右勝

永純

雲井よりうにとさるるやあむの海も月と神はあつらん

虫のさるるさしむ鷹乃ありさしむさしむさしむ

かきさしむ月とさしむ優めして秀逸乃趣わわ

右勝あつらん

十番

左勝

宗因

月とわさるる神よりいさるるかきさしむあつらん

右

秋生

太さるるさしむ神れよは秋とさるるさしむ

秋生

右下句願平懐也 左前句くくく

十一番 秋祝

左

後世

木す念みか秋れ久ああ中あ一樹れ松乃ち世とあうま

右勝

若仍

君うるむじよはひよ契也き記し山子秋万世病とくう絲

十下句祝詞よとくうくちひう人のわくく一也み

これと勝乃字紙付く

十二番

左勝

若生

仙人の事紙巻る葉とそのおに花きぬ君うかすく一也

右

永純

秋乃秋れ月とちう秋言紙れ松より後の君うくく一也

秋祝乃らうらうくく一也いまり末の秋の秋乃月名

秋ゆ秋れ秋れ一もくく一は存りぬ秋勝とくく一

十三番

左持

親秋

ち世れ秋と高よ契て病君乃後と葉史ぬ存の秋うえ

右

宗因

と津史のら秋月日と君ち世よ契てくく一秋とくく一

たちうたわくく一

十四番

左

義象

切く人の印のちと御徳のひうくく一もくく一立くく一九まの免

右

立好

あさうくく一御徳のちうらとちうくく一くく一たはれ今月

おかしき人の言をばさすつゝの釋奠のふかき心  
りくえ言をばせし道あゝしていゝつゝは治世の  
術のなれた事もあらばは此の都なりといふたれ  
のおとしも言をばすつゝのわざとぬきつゝまて  
教ありぬけ判もれ老は作まゝとて白頭時節  
見千戈とぬらんといふとあゝぬきとぬきとぬき  
有るふ道はあらはと申すもわかれぬ心  
なりまゝなりいれおとの業をすゝとあゝぬきとぬき  
とらふふは領秋祝也釋奠の言八月あるなり連  
歌をも年中あるなり事と申すにむらひらひら  
ゝゝの時よのそとて秋をたし結句と九言は秋  
とらふ程あるなりと申すにむらひらひらして明き  
改道もあらはれぬなりと申すにむらひらひらして

あらはらひらひらと申すにむらひらひらして

十五番

尾持

義後

雅とゆひ世はつゝの言をばすつゝの秋とひら

右

光阿

いづくも成津國の春日と申すにむらひらひらして  
右以新嘗祝也年中右以駒迎知治世共以可為  
持

永祿六年八月廿三日

46.000  
5.82

右

義俊 勝二持一	義景 勝一負二
願生 勝二負一	覺阿 持一負二
玄好 勝一持一負一	宗因 勝一持一
俊世 勝一持一負一	親秋 勝一持二
永純 勝二負一	吉仍 勝一負二

大日本國郡全圖 彩色摺箱入 全二冊

此圖ハ明人李汝暉の描く。其蹟を採寫し、觀音の切徳と十身の夜叉を以て、  
 此國ハ明人李汝暉の描く。其蹟を採寫し、觀音の切徳と十身の夜叉を以て、  
 此國ハ明人李汝暉の描く。其蹟を採寫し、觀音の切徳と十身の夜叉を以て、

觀音菩薩埵施無畏之圖 唐紙一枚摺 一幅

此圖ハ明人李汝暉の描く。其蹟を採寫し、觀音の切徳と十身の夜叉を以て、  
 此國ハ明人李汝暉の描く。其蹟を採寫し、觀音の切徳と十身の夜叉を以て、  
 此國ハ明人李汝暉の描く。其蹟を採寫し、觀音の切徳と十身の夜叉を以て、

書肆 尾州名古屋本町通七丁目 永樂屋東四郎  
 江戸日本橋通本銀町二丁目 同出店

